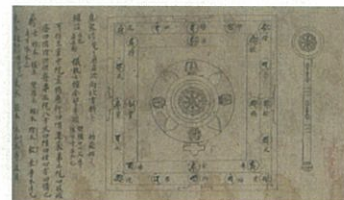


平成20年度購入文化財一覧

【京都国立博物館】(計8件)

- 1 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 護摩壇壇形図像 ごまろだんけいずどう
 ○員 数 一巻
 ○時 代 鎌倉時代 十三世紀
 ○寸 法 等 22.5cm×426.0cm
 ○作品概要 息災・増益・延命・調伏・鉤召・敬愛各法に従い、三重圏種子方曼荼羅六図を描き、その内院に各護摩壇壇形を描き、その支度を記す。その後、敬愛一・息災一・増益一・調伏一・鉤召三・延命一の壇壇形八図を描く。
 なお、鉤召壇壇図は角筆で輪廓したあとに墨線を引いていることが肉眼でも確認でき、図像技法上貴重な資料と言える。巻末左下隅に筆者勤果の奥書墨書がある。かつ、第一紙右下隅に「方便智院」の朱文長方印があり、高山寺伝来と判明する。高山寺聖教中に建仁四年(一二〇四)正月二十六日勤果写『護摩次第』が存在する。また、同寺所蔵寛元三年(一二四五)五月晦日隆真写『事相料簡』は、建永元年(一二〇六)十月十二日勤果書写本を写したものである。勤果の活躍期と宿紙の紙質や字形等は矛盾せず、制作は鎌倉時代十三世紀初頭と断定され、明恵上人在世時に遡及する貴重な作品と言える。かつ、先述のように角筆遺品の基準作の一つとして貴重である。巻軸は、途中で合わせ継ぎをした素木で、本紙と糊付けしておらず、原装をとどめている可能性が高い。
- 購入金額 2,500,000円



- 2 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 山水図屏風(押絵貼 12 図) 王寅筆
 さんすいずびょうぶ (おしえはり 12 ず) おういんひつ
 ○員 数 六曲一双
 ○時 代 清光緒八年、明治十五年(1882)作
 ○寸 法 等 各図本紙 縦 136.5cm、横 48.5cm
 ○作品概要 この作品は、清末の来泊画人として知られる王寅が画いた十二枚の山水図を貼り付けて、六曲一双の押絵貼屏風に仕立てたものである。
 十二枚の図には、季節に変化のある水墨の山水が描かれ、図上に王寅自身がそれぞれ詩文を題するが、その最後の二図に、六言絶句を題した後、「光緒八年冬十月、微雪初晴、焚香写此、金陵王治梅客浪花、(光緒八年冬十月、微雪初めて晴れ、香を焚いて此を写す、金陵の王治梅 浪花に客す。)」という款記があり、西暦 1882 年、明治十五年の十月(恐らくは陰暦)に、大阪に滞在していた王寅が雪の晴れ間に画いたものであることがわかる。他の図には、詩文のみで年記がないことから、それほど時間をおくことなく、十二枚を画き揃え、この図をもって制作を完了したと考えられる。
 王寅は字を治梅といい、江蘇南京の人である。清末の太平天国の戦乱に難を逃れて上海に移り、書画を売って糊口をしのいだ。その画名はわが国にまで聞こえ、招かれて、長崎に遊び、さらに大阪・京都に至った。その来遊は、光緒三年(1877)を最初として、数次に及び、光緒五年(明治十二年、1879)夏から、同十一年(明治十八年、1885)にかけての三回目の来日には、主として京都・大阪に客遊し、売画の傍ら、京阪の文人と交友を結んでいる。またこの折に、『歴代名公真蹟縮本』、



『治梅石譜』、『治梅蘭竹譜』の版本画譜を制作編集し、大阪の書肆から出版している。蘭竹譜の出版は、奥付によれば、明治十五年(光緒八年、1882)九月二十であるが、実際には、十一月七日にずれ込んだようで、その訂正印が捺されている。従って、本作品の制作は、三回目の来日時のもので、『治梅蘭竹譜』出版とほぼ同時期であることがわかる。

本作品十二図の画風は、全体に席画風の簡略なものが多いが、景観には季節に応じた変化があり、治梅特有の柔潤な筆致がよく出ている。治梅が来日中に残した作品は数多いが、本作品はそのうち最大と思われる大作であり、最後の二扇に当て傷が見られるものの、価値は極めて高い。

○購入金額 5,500,000円

3 ○種 別 <絵画>
○名 称 「すゝか」奈良絵本改装絵巻
「すずか」ならえほんかいそうえまき

○員 数 3巻

○時 代 江戸時代前期

○寸 法 等 各縦26.6cm 全長(上)1201.3cm (中)1254.3cm (下)1101.3cm

○作品概要 「すゝか」は、一名「田村草紙」とも呼ばれ、坂上田村麻呂までの四代の物語 特に父俊仁と俊宗(田村麻呂)の鬼神退治を主題とするもので、室町時代後期に成立した、いわゆる室町物語の一編である。「すゝか」の名は、後半に俊宗に加勢する天女「鈴鹿御前」に由来。奈良絵本では「すゝか」の名が多く、写本や絵巻では田村草紙と呼ばれることが多い。物語の梗概は、俊祐将軍が近江・益田池の大蛇と交わって生まれた俊仁は、武勇にすぐれ、妻をさらった奥羽の悪路王を、鞍馬寺の毘沙門天の助力を得て退治した。その時奥羽の賤女と交わってできた子が成長して上洛、父に会い俊宗と名乗る。俊仁が唐土を従えようと出征、不動明王に負けて亡くなった跡を継いだ俊宗は、奈良坂の霊山坊、奥羽の大岳丸、近江の高丸を退治して将軍としての武勇を誇り一門繁栄し、清水寺を創立したというものである。

「すゝか」の伝本としては慶應義塾図書館の写本、天理図書館蔵の刊本(古活字本)などが知られ、絵入本として市古貞次旧蔵の横本五冊、大阪青山短期大学蔵絵巻3巻、京都・清水寺蔵絵巻3巻などが知られ、当館にも縦型奈良絵本から取られた断簡13枚が所蔵されている。

本絵巻は、縦型奈良絵本を解体し、卷子に改装した3巻本で、本文は古活字版刊本とほぼ同文の流布本に属し、大阪青山短大本、清水寺本などと同系であるが、絵巻諸本が二十図であるのに対し、倍の四十一図をもち、図の数が多いのが一つの特徴であり、また、同じ場面を描いている場合、他の絵巻では図様が定型化しているのに対し、これには他本にない図様が多く含まれている。図の密度は高く、形式化した霞などない、大量生産で類型化する以前の特色を示す作品である。

○購入金額 8,000,000円



- 4 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 耕作図屏風 伝狩野元信筆
 こうさくずびょうぶ でんかのうもとのぶひつ
 ○員 数 六曲一隻
 ○時 代 室町時代(16世紀)
 ○寸 法 156.0cm×350.6cm
 ○作品概要 平成八年に当館で開催した特別展覧会「室町時代の狩野派」において、初めて紹介された作品である。
 画中には秋冬の景観を背景に稲刈りから入倉までがあらわされているところから、当初は浸種や田植えといった春夏の場面を他隻に伴う四季耕作図屏風の左隻分であったものであろう。そこに配される諸人物や樹木などは、その大半が大仙院の伝狩野雅楽助筆「四季耕作図(もと襖)」と同様、伝梁楷筆「耕織図巻」から引用されているのがわかるが、他方、藁に寝そべる童子のような新たなモチーフも付加されており興味深い。また他に遺る同じ主題の屏風絵数点と比べると、全体に重厚でしっかりと描かれており、スケール感も大きい。その点、既述の大仙院本と出来映えの上では甲乙付けがたいものがあり、元信(一四七七～一五五九)真筆の可能性も多分に考えられよう。
 なお、本図には「元信」朱文壺形印が異例ともいえるべき右下端に捺されているが、印自体は基準的なものであり、印肉の付き具合もとくに問題はないように見受けられる。
- 購入金額 52,500,000 円



- 5 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 蹴鞠寿老図 曾我蕭白筆
 けまりじゅろうず そがしょうはくひつ
 ○員 数 1 幅
 ○時 代 江戸中期(18世紀)
 ○寸 法 等 縦 109.4 cm 横 44.4 cm
 ○作品概要 2005 年、狩野博幸氏の企画により当館で「蕭白展」が開催されたが、展覧会後に同氏によって見出され当館に寄託された作品。
 白くみえているのは腹ではなく頭。後姿で、長い頭を思いきりうしろにそらして、鞠を蹴り上げる寿老人が描かれている。蹴鞠する七福神の絵といえば、松花堂昭乗や尾形光琳の「蹴鞠布袋図」がつとに有名だが、蕭白によるこの作品はそれらに劣らずユーモラスであって、蕭白に明朗な一面があることを教えてくれる。
 江戸中期、18 世紀の絵画界でとりわけ個性的な画風をしめした曾我蕭白の佳品である。
- 購入金額 3,150,000 円



- 6 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 明皇・貴妃図屏風 狩野山雪筆
 めいこう・きひずびょうぶ かのうさんせつひつ
 ○員 数 6 曲 1 隻
 ○時 代 江戸初期(17世紀前半)
 ○寸 法 等 縦155.2cm 横361.4cm
 ○作品概要 玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を歌う白楽天の『長恨歌』に基づく画題。横笛をまさに吹こうとする玄宗皇帝と舞う楊貴妃。人物の顔は、比較的無表情、吊り上った切れ長の眼、端正な顔立ちなど、他の山雪の人物画と共通する。垂直方向を強調した岩の形と描き方は、他の山雪作品の岩と共通し、水平方向を強調した欄干による画面構成は山雪様式をしめす。右方の棕櫚の描法も、随心院の山雪筆・蘭亭曲水図屏風に登場するものと、まったく一致する。これらにより整然とした印象が得られる。本格的な金地濃彩の屏風で、左下に「狩野氏山雪」の落款と、基準印である「山雪」の方郭鼎印がある。2001年の当館「ヒューマンイメージ」展出品作。
 狩野山雪(1590~1651)は、幕末まで受け継がれた京狩野の第2代で、狩野山楽の娘婿となって後を継ぎ、江戸初期に活躍した。同時に、そのきわめて個性的な画風は辻惟雄氏のいう「奇想の系譜」にも位置づけられ、若冲や蕭白らとともに注目を集めている。
 京狩野は近世京都の絵画史上、不可欠な一派であって、なかでも狩野山楽・山雪はきわめて重要な画家であり、その作品は当館にとっては欠かせないが、当館の館蔵品に山雪の作品は、水墨による《洛外名所図屏風》しかなく、着色作品の収蔵が望んでいた。
 当該作品は、金地濃彩による山雪の優品であり、華やかな画面は展示効果も高く、収蔵するにふさわしい。
- 購入金額 49,350,000 円



- 7 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 白梅群鶏図 狩野永良筆
 はくばいぐんけいず かのうえいりょうひつ
 ○員 数 1 幅
 ○時 代 江戸中期(18世紀)
 ○寸 法 等 縦91.5cm 横42.7cm
 ○作品概要 新出作品。雌雄の鶏と雛鳥、鶏の家族、そして上方に白梅が配され、絹地に着色で、鳥も花もごくごく丁寧に描かれている。一見、若冲の鶏図かとも思われるが、右下に「狩野永良筆」の落款と「狩埜」「永良印」の印、左上に「金門画史」の印がある。
 狩野永良(1741~1771)は、山楽・山雪に始まる京狩野の第6代で、公家の九条家や宮廷を舞台とし活動した。31歳没と若くして亡くなったこともあって、作品の絶対数も限られる。京狩野において、初期の山楽・山雪・永納、幕末の永岳に関しては、かなり研究が進んでいるが、その間の絵師に関しては、これまでまったくといってよいほど研究されていない。今後、研究されるべき絵師たちといえよう。
 とくに、永良作品の紹介は、最近まで皆無の状態だったが、最近、作品2件が出現し、それらの永良作品には、南蘋の写生風や大雅風が見られる。
 この作品は、同時代の伊藤若冲(1716-1800)との関連上、ことに注目されるが、梅の樹幹や花には、当時大流行していた南蘋流の影響が見られ、幹や枝の輪郭のねっとりした動きには、



山雪以来の京狩野の伝統もしめされている。
江戸中期、京狩野の稀少な永良作品であり、出来もよく、収蔵にふさわしい。

○購入金額 3,150,000 円

- 8 ○種 別 <染織>
○名 称 羅地刺繍釈迦阿弥陀二尊図
らじししゅうしゃかあみだにそんず
○員 数 1 幅
○時 代 鎌倉時代 14世紀
○寸 法 等 本紙 縦111.0cm 横51.0cm
○作品概要 掛幅装。向かって右に釈迦、左に阿弥陀如来の立像をあらわす、いわゆる発遣来迎(遣迎)二尊図。
現在確認されている鎌倉時代の繡仏は、阿弥陀三尊来迎図と阿弥陀種子三尊図が圧倒的多数を占める。またそのころは浄土教の普及により、個人が邸内で礼拝するための、小ぶりの作例が主流であった。その中で、本作品は法量が大きく、かつ正面向きの釈迦阿弥陀二尊図という非常に珍しい作品である。刺繍釈迦阿弥陀二尊図の類例は、現在のところ本作品を含め 4 例確認されるのみであり(奈良国立博物館・藤田美術館・新長谷寺)、刺繍阿弥陀来迎図が少なくとも 30 点以上確認されていることと比較しても、その稀少さが伺えよう。
此岸よりおくり出す釈迦と彼岸へ迎える阿弥陀の二尊の組み合わせは、一般的に浄土教普及の初期の過程で、阿弥陀による救済だけでは不安に思う人々に対し、釈迦を背景的な証人として浄土教の優越性を説くためのものであったと考えられている。従って本繡仏は、そのような浄土教の普及過程の現実的な側面を如実に表しているという点でも、貴重といえる。
釈迦は与願、施無畏印の印を、阿弥陀は下生印を結び、両尊ともに透かし彫ふうの舟形光背を負い、六角蓮台上の踏割蓮華座に立つ。ちなみに舟形光背を負う繡仏は、本品のほかに徳川美術館所蔵・刺繍阿弥陀三尊来迎図と奈良国立博物館所蔵・刺繍釈迦阿弥陀図の二作品のみである。上部には宝蓋を、手前には獅子香炉をのせる卓と、一対の花瓶が供えられている。表装の中廻しの部分には、阿弥陀の種子「キリーク」を 48 個並べ、阿弥陀の四十八願をあらわす。表装の天には左右に色紙形を置き、その中に「其佛本願力 聞名欲往生 皆悉到彼國 自致不退転」「於我滅度後 應受持此經 是人於佛道 決定無有疑」という、無量寿經の偈を繡う。表装の地には蓮池をあらわし、中央に裸形の童子が蓮華にのる蓮華化生図を、その左右の洲浜形には迦陵頻伽を配す。
刺繍技法については、糸の剥落が多く、褪色も進んでいるため、判然としない部分もあるが、二尊のバックには緑の地繡を施し、二尊の螺髪、袈裟の条葉と堤、中廻しの種子、色紙形内の経文を、いずれも髪繡であらわす。繡技は主に刺し繡を用い、留め繡、纏い繡なども併用している。髪繡は、主に纏い繡の技法用いている。裳には五弁の小花が白色の糸で繡われ、袈裟の田相部分には丸文を黄や萌葱の糸で表す。条葉および堤部分には、髪繡の上に、留め繡で唐草文様のような模様を施している。下地裂には羅地(籠綴の無文羅)が用いられ、他の繡仏には類例を認めない(知恩院の刺繍袈裟貼屏風、ならびに智積院の刺繍法華經には、本繡仏と同種の羅が用いられている)。また上欄部には小文の綾を用いている。
また、本繡仏の稀少性を高めている要素のひとつとして、箱



蓋裏の墨書より、遅くとも江戸時代には、京都の町衆の邸に伝えられていたことが明らかな点が挙げられる。墨書の内容を要約すると、本作品の所蔵者である小川家八代目平蔵は、文化五年に五歳という幼さで、実母である西皎院紫空恵雲尼を亡くしたが、小川家には養育できるものがいなかったため、父方の伯母で糸屋伊右衛門の妻である浄誉観孝妙政禅定尼に引き取られ、十歳まで世話になる。八代目はその後、実家へ戻り小川家を継ぐが、母に代わって育ててくれた伯母に対する恩義を忘れず、毎年と毎月の仕送りを、伯母が存生中続けた。そしてその伯母が亡くなった際、彼女が大切に守ってきた本續仏が、長年恩義を忘れず援助を続けた八代目平蔵に対し、形見分けとして譲られた、ということが記されている。伝来が明らかな續仏は数少ないため、本續仏は、京都の町衆の間で大切に守り伝えられた事が伺える点においても、非常に貴重といえる。

○購入金額 21,000,000 円

以上